

## 英語における呼びかけ表現について

### Some Observations on English Vocatives

長谷川 ミサ子\*

Misako Hasegawa

#### 1. 呼びかけ表現 (vocative) と呼び声 (call)

まず、最初に、呼びかけ表現 (vocative) と呼び声 (call) とを区別しておく必要がある。日本語においては、vocative も call も、ともに、「呼びかけ」と訳されることがあり、紛らわしいからである。具体的な例として、まず、次の(1)をみることにしよう。

(1) 「おーい、中村くーん。」

これは遠くにいる人に声をかけて、その注意を喚起する際に用いられる表現である。これは本稿においては、「呼び声」とされるものである。これに対して、「呼びかけ」というのは、比較的近くにいる人に向かって直接話しかける際に用いられる呼びかけ表現のことを言う。次の(2)をみることにしよう。

(2) 「お母さん、晩のおかずはなーに。」

この場合の「お母さん」というのは、自分の母親に向かって直接話しかける際に用いられている呼びかけ表現である。

代表的な英語の例をついでにみておくことにしよう。次の(3)は呼び声の例である。

(3) “Edward! Lunch is ready.” (「エドワード! お昼ご飯ですよ。」)

また、次の(4)は呼びかけの例である。

(4) “What are we having for dinner, Mother?” (「晩ご飯はなーに、お母さん。」)

もちろん、同じ表現が呼びかけとしても、呼び声としても用いられるということはある。上の Edward とか mother などはそのいずれにも用いられる表現である。けれども、呼びかけには用いられるが、呼び声としては用いられないという表現もある。例えば、次の(5)はその例である。

(5) You with the sweater on, move about a foot to the left. (セーターを着ているあなた、左の方へちょっと寄って下さい。)

(Zwicky, 1974, p.791)

この場合の you with the sweater on という表現は呼びかけには用いられるが、呼び声としては用いられない、訳文によって示されている日本語からも分かるように、日本語の「セーターを着ているそのあなた」というような表現

も、呼びかけには用いられるが、呼び声としては用いられない。逆に呼び声としては用いられるが、呼びかけとしては用いられないという例も日英両語にみられる。例えば、日本語の「おい」、英語の Hey!/ice cream man (アイスクリーム屋さん! [街頭のアイスクリーム売り]) は呼び声としては用いられるけれども、呼びかけ表現としては用いられない。同様に、cabby (タクシーの運転手) も呼び声としては用いられるけれども、呼びかけ表現として用いることはできない。ただし、すべての呼びかけ表現は呼び声としても用いられるということは言えるように思われる。

以下、本稿においては、呼びかけ表現を中心に述べていくことにする。呼び声よりは呼びかけ表現のほうが、文法的にも語用論的にも、文化的背景という観点からみてもより複雑で、問題をより多く含んでいる表現であるからである。ただ、見知らぬ人に呼びかける呼び声表現として、アメリカにおいてもイギリスにおいても用いることのできる最も便利な表現としては、Excuse me! があるという点を付言しておきたい。同じ状況で用いられる日本語の対応表現としては、「すみません」、「すみませんが」、あるいは、「ちょっと伺いますが」などである。英語の場合も、日本語の場合も、呼びかけ表現ではあるが、呼び声ではないということは断るまでもないであろう。

## 2. 英語の呼びかけ表現と日本語の呼びかけ表現

英語の呼びかけ表現と日本語の呼びかけ表現との間には、大きな違いがいくつかある。まず第一に、注意すべきは、英語の呼びかけ表現が日本語の呼びかけ表現に比べ、その種類が極めて多く、また、その使用頻度も比較にならないほど高いという点である。英語の呼びかけ表現の種類が、日本語の呼びかけ表現に比べ、極めて多いということは、英語の呼びかけ表現に対応する日本語の呼びかけ表現が、しばしば、欠

落しているということの意味する。つまり、すべての英語の呼びかけ表現をそれに対応する日本語の呼びかけ表現に翻訳しようとする、日本語にその適当な対応物が見つからないということが、しばしば、生ずるということの意味する。他方、英語の呼びかけ表現の使用頻度が日本語の呼びかけ表現の使用頻度に比べて、極めて高いということは、英語では呼びかけ表現を用いるのに、日本語では黙っていて、いっさい呼びかけ表現を用いないという場面がたくさんあるということの意味する。この点については、以下に挙げる具体的な例によっても明らかとなるであろう。

どうしてこのようなアンバランスが日英間においてみられるかということ、究極的には、それは文化の違いということになるであろう。文化の違いというのは、結局、個人の確立ということに還元できるのではないかと思われる。イギリス、アメリカの文化においては、個が確立しているため、個と個との間における言語による交渉は、いわば、独立した個人と個人との間において行われるということが対し、日本の文化においては、この点がどちらかといえば、それほどはっきり分化・確立されていないという傾向があるように思われる。逆に言うと英語を用いている際、話し手は、聞き手との関係を保持するため、すなわち、話し手は聞き手との間に、チャンネルが開いていて、それが、閉ざされていないことを確認するため、あるいは、確保するため、話の途中において、しばしば、話しかけ表現を用いるという言い方ができるかもしれない。日本語の場合には、話を始めてしまった後は、そのチャンネルは、いわば、呼びかけ表現を用いなくても確保されているという感じが、話し手にも聞き手にもあるのではないかと思われる。

わが国において、英語の呼びかけ表現に関する研究が行われ始めたのは、比較的最近のことであると考えられる。紀要論文、雑誌論文などにおいて、英語の呼びかけ表現が取り上げられ

るようになってきたのは、この現象に関する興味、それだけみられるようになってきているということの証拠であることは明らかであるが、この現象が従来あまり研究の対象となっていなかったのは、なぜであろうか。また、最近になって、この現象が、ようやく人々の注意を引くようになってきたのは、なぜであろうか。最も簡単な答えを与えるとすれば、それは、わが国における英語学研究の手が、ようやくこの領域にまで伸びてきたというものであろう。すなわち、従来は英語学研究の領域が、この段階にまでは及んでいなかったというふうに考えられる。それは、また、なぜであろうかと考えてみると、一般的な用語を用いるならば、日本の国際化が進んだ現れの一つと考えることができるであろう。つまり、日本人がイギリス人、アメリカ人と直接英語を用いて、様々な交渉関係をもつような時代になってきているということであろう。もっと言うなら、従来の印刷物を通じて、主として英語と接してきた段階においては、呼びかけ表現を用いるという機会にすら恵まれることはほとんどなかったし、呼びかけ表現に接する機会もなかったと言ってよいのに対し、最近では、直接英米人に呼びかけ表現を用いる機会、あるいは、英米人によって、呼びかけ表現を我々自身が受けるという機会が次第に増えてきているということである。こういう角度からすれば、日本の国際化というのは、我々が、生の英語表現の海の中に、いわば、浸っている時間、および機会が長くなってきているということを意味すると考えることができるであろう。

以上のような状況が与えられているにしても、特別な呼びかけ表現を、我々が直接用いるという確率は、極めて低い。例えば、Your Excellency [大使などに対して用いる]、Your Highness [王子や王女などに対して用いる]、Your Ladyship [Ladyの称号を持つ婦人に対して用いる]、Your Majesty [王や女王などに対して用いる]、Mr. President [男性の大統領

に対して用いる]、Madam President [女性の大統領に対して用いる]、Prime Minister [総理大臣などに対して用いる]のような表現を我々が用いるという機会は、通例ほとんどゼロに近いといっても言い過ぎではないであろう。したがって、このような特別の肩書きをもつ人に対する特別の呼びかけ表現に関して誤解を生ずるといような機会は実質的にはないといつて言い過ぎではないであろう。問題は、むしろ、我々が外国人として英語を用いる場合でも、出合う呼びかけ表現に関する不十分な理解によって生ずると考えられる様々な問題のほうに、重要な事柄となってくるであろう。

呼びかけ表現というのは、ただ単に、相手にことばをかけるというだけの表現ではない。ある特定の呼びかけ表現を用いると、それによって、実に様々なことが分かってくる。例えば、話し手が相手の人をどれくらい身近な存在と考えているか、話し手が相手をどれだけ身分の上下関係がある人であると判断しているのか、あるいは、さらに、話し手が、相手に対してどのような評価を与えているか。つまり、プラスの値をもっている好ましい人として分類しているのか、あるいは、好ましくないマイナスの評価をとまなう人として分類しているのか、等々のことが一挙に分かるようになってきているのである。この点に関する十分な理解がないと呼びかけ表現によって、理解されるべき情報が理解できないとか、あるいは、間違った呼びかけ表現を用いることによって、予期していなかった誤解を人に与える危険があるという問題が出てくる。これは、従来、日本における英語研究においては、全くと言ってよいほど欠落していた部分であるので、特に注意を要する。英和辞書における呼びかけ表現の扱いも、従来は極めて不十分なものであったといわなければならないであろう。この点は、これから次第に訂正されてゆくものと思われる。

### 3. 英語における呼びかけ表現の落とし穴

一見、なんでもないと思われる英語の呼びかけ表現においても、特に、我々外国人にとっては、様々の落とし穴がある。この落とし穴というのは、二つの種類に分けて考えてゆくことができる。一つは、一見、見えそうに思われるけれども、実際は、使うことができないという呼びかけ表現であり、もう一つは、その逆で、使えないかと思われるのに、使うことができ、あるいは、一般によく用いられているという呼びかけ表現の場合である。以下、この順に考えていくことにする。

#### 3. 1. 見えそうで使えない呼びかけ表現

まず、最も簡単な例として、次の(1)をみることにしよう。

(1) \*Teacher! Teacher! (先生! 先生!)

この(1)の表現は、小学校、中学校の教室などで、先生の質問に答えようとして、生徒が用いる表現として取り上げたものである。日本の学校においては、手を挙げた生徒が、先生! 先生! とよく言うけれども、そのような状況において、英語の teacher を用いることはできない (LDOCE<sup>2</sup>, 1987, p.11)。実際には何が用いられるかという点、次の(2)の文の型となる。

(2) a) Can we go home now, Miss?  
 b) Can we go home now, Sir?  
 (COBUILD, 1987, p.924, p.1358;  
 LDOCE<sup>2</sup>, 1987, p.665, p.982)

今度は、次の(3)の文をみることにしよう。

(3) a) Tell me, professor, why dogs hate cats.  
 b) Tell me, doctor, why dogs hate cats.  
 (Zwicky, 1974, p.790)

ところが次の(4)は用いることができない。

(4) a) Tell me, \*assistant professor, why dogs hate cats.  
 b) Tell me, \*surgeon, why dogs hate cats.

(Zwicky, 1974, p.790)

すなわち、同じく大学の教官であっても、professorのほうは呼びかけとして用いることができるのに対し、assistant professorのほうは呼びかけとして用いることはできない。同様に、同じく医者でありながら、doctorのほうは呼びかけとして用いることができるのに対し、surgeon (外科医)のほうは呼びかけとして用いることができない。このような区別がなぜ存在するのかということは、究極的には明確な答えを示すことができないと思われる。ただ、一般的に恐らく言えると思われるのは、ある人を職業的に表す場合、その最も一般的な名称に基づく呼称は可能であるけれども、その段階よりも細かな下位区分を示す職業名を用いることはできないということであろう。ただ、どの段階の分類名が呼びかけ表現として用いられるのかという点を明確に、しかも、あらかじめ規定しておくことは不可能であるように思われる。

今度は、やや異なる例として、次の(5)をみることにしよう。

(5) Driver, what's the best route to San Jose? (運転手さん、サンホセへ行く一番いい道はどれですか。)  
 (Zwicky, 1974, p.790)

この場合、driverはタクシーの運転手に向かって用いられている呼びかけ表現である。driverという語を辞書で引くと、自動車、バス、トラック、タクシー、列車を運転する人、などと出ている。つまり、driverというのは、車であれば、どのような種類の車を運転している人についても用いうる単語である。にもかか

ならず、呼びかけ表現としての driver は、タクシーの運転手に限られる (Zwicky, 1974, p. 790). 要するに、上で述べてきた professor, とか doctor, driver などが、呼びかけ表現として用いられる場合、誰に対して用いることができ、誰に対しては用いることができないかというのは、単語ごとに決まっている約束であって、同じ意味を表す他の単語を同じように呼びかけ表現として用いることができるとは限らない。つまり、呼びかけ表現として用いられる表現は、すべて、一種のイディオムである (Zwicky, 1974, p.791). したがって、外国人として呼びかけ表現を用いる際には、一つ一つ、個別に覚えてゆく必要があるということになる。このことは、呼びかけ表現の辞書における扱いが、それだけ重要性を増すということをも意味するであろう。

次に、親族間における呼びかけ表現について少し考えてみることにしよう。まず、日本語における例として、次の(6)をみることにしよう。

- (6) お父さん  
お母さん  
おじさん  
お兄さん  
お姉さん

これらの呼びかけ表現は、日本語としては全く自然なもので問題はない。ただ、日本語における呼びかけ表現は、鈴木 (1970) によってよく知られているように、一番年少の成員の視点から与えられているものであるから、妹、弟という呼びかけ表現は存在しない。これに対する英語の呼びかけ表現を、次の(7)に挙げることにしよう。

- (7) father  
mother  
uncle  
\*brother  
\*sister

すなわち、お兄さん、お姉さんに当たる英語の家族間における呼びかけ表現は、欠落していることになる。もちろん、宗教関係の用語としての brother [修道僧、修道士の間で用いられる]、sister [修道女、シスターの間で用いられる] が呼称として用いられるのは別である。

日本では、親しく付き合っているよその家庭に招かれて行った場合など、その家の男兄弟の兄のほうに向かって、「お兄ちゃん、こっちへ来てごらんなさい」のような言い方を用いることは、普通であるけれども、英語の場合、brother をそのようなときに用いることはできない。家族の間においても、親しい付き合いの人間同士の間においても、このような場合、英語では、通例、名前 (first name) が用いられると考えられる。

英語の親族名称の一つと考えられるものの中で、注意を要するものに、son がある。次の(8)をみることにしよう。

- (8) 'Don't worry son,' he said. 'It'll turn up soon.' (「心配することはないよ、おまえさん。じきに、上向いてくるだろうさ。」)  
(COBUILD, 1987, p.1389)

注意すべきは、このような呼びかけ用語として用いられる son が、自分の子供に向かって用いられるものではなく、他人の男の子、あるいは、男性で自分より年下の人に向かって、親切的な愛情を込めた態度でものを言う際に用いられる表現である。

### 3. 2. 使えなさそうで使える呼びかけ表現

我々外国人の立場からすると、一見、使えなさそうに思われるのに、実際には用いられている英語の呼びかけ表現というのは、想像以上に多くみられる。極めて特殊なもの、あるいは、特別な人たちによって特別の場合にだけ用いられるものというような呼びかけ表現は、いずれにせよ、我々外国人にはあまり縁がないものである。したがって、それらは辞書に譲るとし、

本節の考察からは除外することにしよう。そのような特殊なものを除外した後に残る依然として膨大な英語における呼びかけ表現が、我々外国人の立場からすると、一見、使えないのではないかと思われるというのは、それらの対応物が日本語にはないことを意味する。したがって、多くの場合、それらの英語の呼びかけ表現は、日本語に訳すことができないものである。そのような呼びかけ表現のもっている様々な意味を理解するためには、対応する日本語の呼びかけ表現は用いえないのであるから、そのような英語の呼びかけ表現が用いられる場面、特に、どういう人が、どういう人に対して、どういう場合に、どういう意図をもって、どういう感情を込めて用いるかということを実験的に記述し、それによって理解をうるということをするしかない。

極めて多くの呼びかけ表現が、日本語では不可能であるのに、英語では可能であるというのは、どうしてであろうかという、部分的には既に述べるところがあったように、究極的には英語の文化に還元される問題であるかもしれない。けれども、それらをやや分析的に考えていくと、様々な下位類を認めることができる。例えば、まず、職業名についてみることにしよう。日本語において、呼びかけ表現に用いることのできる職業名は、極めて限られている。例えば、八百屋さん、魚屋さん、肉屋さん等々があるけれども、英語における呼びかけ表現として用いる職業名の種類は、極めて多彩である。例えば、次の(1)をみることにしよう。

- (1) waiter  
 conductor  
 bartender <アメリカ英語>  
 nurse  
 driver

(Quirk, 1985, p.774)

これらのうち、日本語に対応するものが、全くないわけではないと思われるものも含まれてい

るかもしれない。看護婦さんに呼びかけるとき、nurseと英語で言うときに、日本語で看護婦と言うことはないので、そういう観点からすると全く対応するものはないかもしれない。bartenderに関しては、バーテンとくだけて言うかもしれない。conductorなども同じで、車掌さんと言うことはあるけれども、車掌というふうに全くtitleも敬称も付けないで、いきなり、そのまま用いるということは日本語の場合はない。したがって、英語で、裸のまま、nurse, bartender, waiter, waitressなどの形が用いられているのを耳にすると、我々には、ややぶっきらぼうな感じを与えるように思われる。

これらの場合、特に注意を要する点が、一つある。それは、先にも触れるところがあったdoctor, professorなどとの対比である。結論的に言うと、doctor, professorは、(1)に挙げた職業名とは異なり、称号である。称号というのは、例えば、Prime Minister (総理大臣), Bishop (司教), general (将軍), major (市長) などと同じ資格のものであり、一方、(1)に挙げた呼びかけ表現は、職業名に属するものである。この二つの違いは重要で、職業名のほうは、例えば、conductorとかwaiterという呼びかけ表現は、お客として、その人たちに対応している場合に限って使用することができる。病院に勤めている間の看護婦さんには、nurseと言うことができるけれども、一度、病院を出て、例えば、バスの停留所とか、家の近所とかで、出合ったとき、nurseと呼びかけることはできない。つまり、その職業に従事している間だけ、その名前で呼ぶことができるのが職業名という呼びかけ表現である。これに対して称号とされるmajor, doctor, professor, Bishopとかいうのは、その人がどこにいても、そして、話し手が特別な関係にいる場合でなくても、常にその名前で呼ぶことができる。いわば、称号というのは、全人格的なものであって、その人全体と同じ、いわば、重さのもの、

その人全体を代表するものであって、したがって、どこにいても、いつでも、どのような場合でも、呼びかけ表現として、その人に対して用いることができる。これに対して職業名のほうは、その人の全人格すべてと等価なものではなくて、その人の、いわば一面を、働いているときの一面のみを代表する呼び名であるにすぎないというように考えられる。この点は、Quirkにも Zwicky にも言及はないけれども、このように考えるべきものであると思われる。

呼びかけ表現に形容詞を用いるという傾向も、日本語にはほとんどみられない英語の特色であると言ってよい。次の(2)をみることにしよう。

- (2) a) sweet, pretty, (my) dear, (my) dearest, handsome, beautiful, \*cute, \*kind  
 b) fatty, stupid, imbecile  
 c) slim, skinny, tinny [同じく体形を表す語でも, \*thin, \*little, \*short などは用いられない], red (赤毛の人) [同じく髪の毛の色を指す語でも, \*white (白髪の人), \*chestnut (栗色の髪の毛の人) などは用いられない]

(2 a) は好ましい意味内容をともなっている呼びかけ表現, (2 b) は好ましくない意味内容をともなっている呼びかけ表現である。(2 c) は, 体形上の特徴が基盤となっている呼びかけ表現である。いずれの場合も, 対応する日本語の呼びかけ表現は, ほとんど存在していないと思われる。したがって, 訳語を与えるのは, やはり, ほとんど不可能であると思われる。もちろん, stupid のような場合, 日本語でも「おばかさん」というような呼びかけ表現が, 用いられる場合もないとはいえないであろう。けれども, その用いられ方には, やはり, 違いがあって, 英語におけるほど普通に用いられることはないと考えられる。特に, (2 b) のような好ましくない意味をともなう呼びかけ

表現が用いられることは, 日本語の場合, けんかでもしていない限り, 用いられることはほとんど決してないと思われる。

同様に, 次の(3)に挙げるような評価を表す名詞表現についても似たようなことが観察される。

- (3) a) (my) love, (my) friend, (my) sweetie-pie <特にアメリカ英語>, (my) darling, honey <特にアメリカ英語>, blonde  
 b) coward, idiot, liar, bastard (<私生子>)

特に注意すべきは, これらの形容詞, 名詞表現が相手の身体の特徴, 性質に言及している場合が多いということである。特に目立つのは, 髪の毛の色に基づいた呼びかけ表現の多いことである。これは, 日本語では, 髪の毛は大体, 黒と決まっているので, 髪の毛で相手を区別する呼びかけ表現を用いることは, ほとんど不可能である。これとは別に, 相手の性質にせよ, 体形にせよ, 相手の身体的, 精神的特徴に言及する呼びかけ表現は, 日本語の場合, 対応するものがないけれども, 対応するものを考えようとしても, それは, 大変失礼な呼びかけ表現になると考えられる。一般に相手の身体の特徴に言及する場合, それが好ましい特徴であるならば, 別であるけれども, マイナス的な評価をともなう特徴であるならば, ほとんど日本語では考えられない呼びかけ表現である。そういうのが英語にはたくさんみられるというのが特に注意すべき点である。

以上, 日本語では, 呼びかけ表現としては, ほとんど成立しないと考えられるのに, 英語では用いられるという表現について, 代表的な例を考えてきたが, 実際は, はるかに多くの語が, このような形で, つまり予期しない形で用いられている。これをみるには, 呼びかけ表現を比較的重要視している辞書によってみるのが, 最もよい方法であろう。以下のセクション

においては、いくつかの辞書に基づいて、この点を考察することにしよう。

#### 4. 辞書における呼びかけ表現の扱い

我々は、これまで、英語の呼びかけ表現に関し、それらが日本語における呼びかけ表現よりは圧倒的に多いこと、および、日本語からの類推で考えると、使えなさそうに思われるのに使われる呼びかけ表現、使えそうに思われるけれども、使われない呼びかけ表現などがみられることを論じてきた。しかしながら、以上、述べてきたのは、そのサンプルの極めて限られたものについてであり、英語の中において、実際どれぐらい多くの呼びかけ表現が用いられているかということは、以上の考察からは全く不明であるといっても言い過ぎではないであろう。実際に、どれぐらい多くの呼びかけ表現が英語において用いられているかということは、呼びかけ表現を比較的詳しく記載している辞書に当ててみるしかない。

呼びかけ表現が、比較的詳しく記載されている辞書として、まず、*Longman Dictionary of Contemporary English* (以下、LDOCE<sup>1</sup>と略記する)がある。筆者は、まず、この辞書において、Nという表示のあるものを丹念に片端から拾ってゆくことにした。この場合、Nは nouns that are vocatives, they can be used in the singular in direct address to one person を意味する表示である。その結果が付表の I である。この LDOCE<sup>1</sup>には、その後、第二版が出ており、その第二版 (以下、LDOCE<sup>2</sup>と略記する)においては、本文に Language Notes: Addressing people という表示のあるものを拾っていった。これも付表 I に表示した。さらに、最近出版されたもので、vocative の表示が比較的是っきりしているものに *Collins Cobuild English Language Dictionary* (以下、COBUILD と略記する)がある。これは資料も新しいし、実際、慣用に基づいているものである。これを付表 I の中にやはり併記する

ことにした。COBUILD の名詞、形容詞などをみていくと、文法記載欄に、voc という略語が vocative として用いられる語には付けられている。したがって、これを丹念に網羅的に拾ってゆけば、現代英語における最も網羅的な英語の呼びかけ表現のリストが得られることになる (付表 I 参照)。

付表 I をみて、すぐ気がつくことがいくつかある。まず、英語における vocative 表現の数が極めて多いということに驚く。さらに、注意を引く点として、LDOCE<sup>1</sup>と LDOCE<sup>2</sup>との間にみられる大きな総数の差である。すなわち、LDOCE<sup>2</sup>においては、その数が激減している。実際に数えてみると、 $471 - 39$  (LDOCE<sup>1</sup> - LDOCE<sup>2</sup>) = 432、具体的な数で言えば、432 語の項目の数が減ったことになる。これは、どうしてであろうか。LDOCE<sup>2</sup>には vocative を減らした理由について言及はみられないようである。LDOCE<sup>2</sup>には vocative 以外の点においても、LDOCE<sup>1</sup>を簡略化している場合が少なくない。例えば、文法事項などにおいても、その例がみられる。しかし、vocative に限って考えてみると、少なくとも LDOCE<sup>1</sup>の時期において用いられていた呼びかけ表現が、LDOCE<sup>2</sup>を出版する時期においては急にイギリスにおいて用いられなくなったことを意味するのではないであろう。これは、ほとんど疑いの余地がない。言語使用に関する一般の人々の習慣が、9年という短い期間の間に、それほど大きく変化するということは考えられないからであるとすると、この LDOCE<sup>2</sup>における数の減少は、辞書の編纂者が vocative に関する知識が、LDOCE<sup>1</sup>におけるほど詳しく提供される必要はないと判断したからであると思われる。事実、vocative 表現の中には、極めて特殊な環境において、極めて特殊な人々だけが、用いるというものが数多くみられるからである。

まず、一般に英米を問わず世界的な言語の、いわば、社会現象ともいべきものに関してみられる顕著な傾向の一つとして、差別語の廃用



ということがある。これと並行的に相手をのしることば、相手を軽べつすることば、相手の感情を害するようなことば、要するに、人間関係を損なうに至るようなことばの使用は、一般的に言えば、次第に避けられる傾向にあると言ってよい。このことが、LDOCE<sup>2</sup>における相手を軽べつする際に用いられる、いわば、マイナス的な値をもっている呼びかけ表現が減少している原因の一つでもあるかと思われる（マイナス的な値をもっている呼びかけ表現の数はLDOCE<sup>1</sup>においては、215語であり、LDOCE<sup>2</sup>においては、すべて削除され、その数はゼロとなっている）。

一方、COBUILDのほうは、LDOCEとは別個の調査に基づくものであり、別の意味で、現代英語の手がかりとして有益なものである。ところが、三つの辞書に共通であるものを調べていくと、その数は、また、驚くほど少ないことがわかる（付表II参照）。この表によってみれば、三つの辞書に共通の呼びかけ表現として記載が認められるのは、わずかに21語である。この中から、家庭内で用いられる語を除いてみるとしよう。家庭内で特に用いられる語というのは、dad, daddy, father, mom, mother, mum, mummyである。それらを除くと、残りは14語になる。その残りの中から、さらに、愛情表現と考えられる、つまり、主として夫婦、恋人同士などの間で用いられるもの（darling, dear, honey, love, sweetheart）を除くと、残りは doctor, lady, madam, Madam, mate, miss, pal, sir, Sirのみとなる。これによってみれば、親族用語、および主として親族、恋人間における愛情的呼びかけ表現を除くならば、一般社会において、人を呼ぶときに用いられる数語（9語）のみが共通のものとして残ることになる。我々外国人としては、この最後に残ってくる種類の語を中心として、それを誤りなく用いるように十分な知識を身に備えるということが望まれるということになるであろう（→§5）。

付表Iにみられる英語の呼びかけ表現をその内容別に分類するとどうなるであろうか。これを示したのが付表IIIである。付表IIIにおける分類は、全く厳密であるわけではない。すなわち、この分類は、多少の揺れを許容するものであるが、大体の傾向を知るためには、十分なものであると考えられる。付表IIIによってみれば、呼びかけ表現の総語数は、530語であり、特に、この中で目立つのは、軽べつ表現、つまりマイナス的な値をもった表現が253語、すなわち、47.7%、呼びかけ表現全体の約半数を占めているという事実である。その他、10%以上にのぼっているのは、地位に関係のある140語、26.4%、および愛情表現の81語、15.3%である。残りは10%以下で、親族用語関係が34語、6.4%、職業名に関するものが22語、4.2%となっている。軽べつ表現にかかわる呼びかけ表現の数が、極めて多いというのは、それ自体でも驚くべきことであるが、日本語と比較して考えた場合には、さらに、驚くべき数字であると言ってよい。日本語においては、既に触れるところがあったように、軽べつ的な呼びかけ表現というのは、けんかでもしているときでない限り、ほとんど用いられないからである。このことから、日英の文化に関する一般化を引き出すことも不可能ではないかもしれないが、それはやや危険をとまなう作業になるであろう。

## 5. 注意を要する呼びかけ表現

我々外国人が英語を外国語として学び、用いるとき、特に注意を要する呼びかけ表現として、どのようなものがあるのかということを変更して考えてみることにしよう。既に触れるところがあったように、極めて特殊の人たちが、あるいは、特殊な関係にある人たちが、特殊な場面において用いる表現というのは、一般的にはそれほど我々にとって、問題となることはないと思われる。ただ、従来の社会情勢とは異なっており、外国の親しい友だちが、今までよりも、一

般論として、増加する傾向にあるというようなことを考えると、相手を first name で呼ぶか、last name で呼ぶか、その切り替えは、いつ行われるのか、というようなことが、従来よりも問題となってくるということは考えられる。が、以下では、英語教育の中において、問題とされてしかるべき表現を簡条書きに述べてゆくことにしよう。

(1) aunt と uncle は、first name で呼ぶことはできるけれども、last name で呼ぶことは行われぬ。例えば、aunt/Aunt Margaret とか、uncle/Uncle Tom というのは良いが、\*aunt/Aunt Browning とか、\*uncle/Uncle Brown というのは用いられない。

(2) Mr. は last name とともに用いられることも、first name+last name という結合に対して用いられることもある。さらに、first name とのみ用いられる場合もみられる (Zwicky, 1974, pp.788, 794)。例えば、Mr. Smith, Mr. John Smith, および、Mr. John の形が用いられる。ところが、Mr.を除いて、いわば、裸で Smith, あるいは、John Smith という形を用いると、これは、特別な場合に限られる。すなわち、John Smith というのは、やや命令口調で、軍隊などで用いられる形となり、Smith だけであると、教室で先生が生徒に対して用いるというような場合の形となるので注意を要する。Mr. は Mr. President, あるいは、Mr. chairman というような用法も、極めて一般的であるので、承知しておく必要がある。

(3) Mrs. は Mr. と並行的に既婚女性の last name とともに、first name+last name の結合形についても用いることができる。例えば、Mrs. Jones の形も、Mrs. Sarah Jones の形も用いられる。

(4) Miss は last name とともに、first name+last name の結合形に対しても用いられる。さらに、first name とのみ用いられる場合もみられる (Zwicky, 1974, pp.788, 794)。例えば、Miss Brown の形も、Miss Elizabeth Brown の形も、Miss Elizabeth の形も用いられる。

(5) なお、Mr., Miss は名前の分からない人に対して呼びかける際にも用いられるが、Mrs., Ms. は用いられないということにも注意を要する。Mrs., Ms. の代わりには、Lady を用いる。例えば、

“What’s the time, mister?” asked the little boy. (「今、何時ですか、おじさん」とその子供が聞いた。)

(LDOCE<sup>2</sup>, 1987, p.666)

Excuse me, miss, is that your umbrella? (あれはあなたのかさですか、お嬢さん。)

(LDOCE<sup>2</sup>, 1987, p.665)

Are you being served, Madam? (お客様、ご用承っているのでしょうか。)

(LDOCE<sup>2</sup>, 1987, p.628)

Would you like your coffee now, Madam? (お客様、コーヒーお持ちしましょうか。)

Would you like your coffee now, Sir? (お客様、コーヒーお持ちしましょうか。)

(LDOCE<sup>2</sup>, 1987, p.11)

What would you like, sir? (お客様、何を差し上げましょうか。)

(COBUILD, 1987, p.1358)

Pay your bill, lady. (お勘定をお支払い下さい、お客様。)

Well, lady, I can’t do anything about this. (でも、奥様、私はこの件については何もすることができません。)

(COBUILD, 1987, p.806)

## 6. 呼びかけ表現と英語教育

以上、英語の呼びかけ表現に関し、注意すべき点をいくつか挙げ、辞書における扱いに関しても、ある程度の調査を行ってきた。これを日本の外国語としての英語教育との関連でみると、どのような点が注意すべき点として考えられるであろうか。最も注意すべき点としては、呼びかけ表現が、直接人間関係に響く側面をもっているという点であろう。場所を選ばず、人を選ばず、勝手な呼びかけ表現を用いると、そのことによって一挙に友好的な人間関係が崩れてしまうことは、十分に考えられるからである。したがって、呼びかけ表現を用いる際には、その場面と相手との距離、親しさの度合い等々の点を十分に考慮して用いなければならないというのは言うまでもない。が、直接自分で、アメリカ人、イギリス人などに対して呼びかけ表現を用いる場合には、これなら絶対に間違いないという知識をもっている呼びかけ表現にだけ限って用いるという注意が肝要であろう。これは、特に呼びかけ表現は、どの一つを取っても、それぞれが一つずつ、イディオムであるという点があるからである (Zwicky, 1974, 参照)。イディオムというのは、拡張や、入れ替えや、類推によって新しい形を作るということを許さないものである。すなわち、一つずつ、一つずつ、個別に、どういう場面で、どれを用いるかを覚えてゆかなければならないものである。したがって、呼びかけ表現は、人を見たら注意を引くのに適当に用いるというのではなくて、一つずつ、個別に他のイディオムと同じように覚えて、そして使うべきものであるという点に、特に注意する必要があると思われる。

付 表 I

	LDOCE <sup>1</sup>	LDOCE <sup>2</sup>	COBUILD
abess	○	×	×
abbot	○	×	×
admiral	○	×	×
angel	×	×	○
animal	×	×	○
ass	×	×	○
attendant	○	×	×
aunt	○	○	×
babe	○	×	○
baby	○	×	○
bag	×	×	○
barmaid	○	×	×
barman	○	×	×
bartender	○	×	×
beast	○	×	×
beloved	○	×	×
berk	○	—	○
bighead	○	×	○
bigmouth	—	—	○
bishop	○	×	×
bitch	○	×	○
blabbermouth	○	×	○
blackguard	○	×	○
bleeder	○	×	×
blighter	○	×	×
blockhead	○	×	×
blunderer	○	×	—
boatman	○	×	×
boatswain, bos:n	○	×	×
bombardier	○	×	—
bonehead	○	×	—
boots	○	×	—
boss	○	×	×
bounder	○	×	○
boy	○	×	○

boys	○	×	○
brat	×	×	○
brethren	○	×	×
brother	○	×	○
Bruin	○	—	—
brute	×	×	○
bud	○	×	○
buddy	○	×	○
bugger	×	×	○
buster	○	×	○
busybody	×	×	○
butterfingers	○	×	○
cabby, cabbie	○	×	×
cad	○	×	○
caller	○	×	×
captain	○	×	×
cardinal	○	×	×
caveman	○	×	×
central	○	×	×
chairman	○	×	○
chairwoman	○	×	×
chamberlain	○	×	×
champ	○	×	×
chancellor	○	×	×
chap	×	×	○
chauffeur	○	×	×
cheapskate	○	×	×
cheat	○	×	×
cherub	○	×	×
chick	○	×	×
chicken	○	×	×
chief	○	×	○
child	○	×	×
Christ	○	×	×
chum	○	×	○
cissy	○	×	○

clever dick	○	×	—
clod	○	×	○
clodhopper	×	×	○
clot	○	×	○
clown	×	×	○
coachman	○	×	×
cobber	○	×	○
cock	○	×	○
colonel	○	×	×
comedian	○	×	×
comic	○	×	×
commander	○	×	×
commie	○	—	×
commissar	○	×	—
commissioner	○	×	×
commodore	○	×	×
comptroller	○	×	—
comrade	○	×	○
conductor	○	×	×
congressman	○	×	×
constable	○	×	×
controller	○	×	×
coot	○	×	○
copilot	○	×	×
copycat	○	×	○
corporal	○	×	×
councillor	○	×	×
count	○	×	×
countess	○	×	×
cousin	○	×	×
cow	○	×	○
coward	○	×	○
coxcomb	○	×	—
crab	○	×	×
crackpot	○	×	×
crank	○	×	×

crawler	○	×	×
cream puff	○	×	—
creep	○	×	×
cretin	○	×	○
crone	○	×	×
crook	○	×	×
crosspatch	○	×	—
crumb	○	×	×
crybaby	○	×	○
cuckold	×	×	○
cunt	○	×	○
cur	○	×	—
curmudgeon	○	×	—
cutthroat	○	×	×
dad	○	○	○
daddy	○	○	○
darling	○	○	○
dean	○	×	×
dear	○	○	○
dearest	○	×	○
dearly beloved	○	—	—
deary, dearie	○	×	○
dimwit	○	×	○
dobbin	○	—	—
doc	○	×	○
doctor	○	○	○
dog	○	×	×
dolly	×	×	○
dolt	○	×	○
Don	○	×	—
dope	×	×	○
Dr	×	○	×
driver	○	×	×
ducat	○	×	—
duchess	○	×	×
duck	○	×	×

ducky	○	×	—
dullard	○	×	×
dumbbell	○	×	×
dumbo	—	—	○
dummy	×	×	○
dunce	○	×	○
dunderhead	○	×	—
earthling	○	×	—
effendi	○	—	—
Eminence	○	×	×
Excellency	○	○	×
faggot	×	×	○
fascist	○	×	○
fathead	○	×	×
father	○	○	○
Father	○	×	○
fatty	○	×	○
(good) fellow	○	×	○
fibber	○	×	×
fiddler	○	×	×
fidget	○	×	×
field marshal	○	×	×
fiend	○	×	×
fink	○	×	×
first lieutenant	○	—	—
flatterer	○	×	○
fleet admiral	○	×	—
flight lieutenant	○	×	×
fogy, fogey	○	×	○
folks	○	×	○
fool	○	×	○
foureyes	○	×	—
friend	○	×	○
fruit	○	×	×
fucker	○	×	—
fuddy-duddy	○	×	○

fusspot	○	×	○
gaffer	○	×	×
gal	×	×	○
gel	×	×	○
general	○	×	×
gentleman	×	○	×
girl	○	×	○
glutton	○	×	×
God	○	×	○
good-for-nothing	○	×	×
goose	○	×	○
gorgeous	×	×	○
governor	○	×	○
grace	○	×	×
gran	○	×	○
grandad	○	×	○
grandaddy	—	×	○
grandfather	○	×	○
grandma	○	×	○
grandmother	○	×	○
grandpa	○	×	○
granny, grannie	○	×	○
greedy-guts	○	×	—
grouch	○	×	×
group captain	○	×	—
gut	×	×	○
guttersnipe	○	×	—
guv	○	×	○
guvnor	○	×	○
guy	×	×	○
hag	○	×	×
half-wit	○	×	×
ham	○	×	×
harlot	○	×	×
harpy	○	×	×
harridan	○	×	—

has-been	○	×	×
heart breaker	○	—	—
heathen	○	×	×
hellcat	○	×	—
Highness	○	○	×
hillbilly	○	×	×
hireling	○	×	×
Holiness	○	×	×
honey	○	○	○
honkie, honky	○	×	—
honour	○	×	○
hooligan	×	×	○
horror	×	×	○
hostess	○	×	×
hound	○	×	×
humbug	○	×	×
hussy	○	×	○
hypocrite	○	×	×
idiot	○	×	○
ignoramus	○	×	×
imbecile	○	×	○
impostor	○	×	×
innkeeper	○	×	×
insect	○	×	×
inspector	○	×	×
jackass	○	×	○
jerk	○	×	○
judge	○	×	×
Junior	○	×	×
Kaiser	○	×	—
kid	○	×	○
kiddie, kiddy	○	×	×
killjoy	○	×	×
kitty	○	×	○
lad	○	×	○
laddie, laddy	○	×	○

lady	○	○	○
Lady	○	×	×
ladyship	○	○	×
landlord	○	×	×
lass	○	×	○
lassie	○	×	○
leftie	—	—	○
listener	○	×	×
lord	○	×	○
lordship	○	○	×
love	○	○	○
lovely	○	×	×
lovey	○	×	—
lump	○	×	×
luv	○	×	○
ma	○	×	○
ma'am	○	○	×
mac	○	×	×
madam	○	○	○
Madam	○	○	○
mademoiselle	○	×	×
maestro	○	×	○
Majesty	○	×	×
major	○	×	×
mam	×	×	○
mama	○	×	○
mamma	○	×	○
mammy	○	×	○
man	○	×	○
marshal	○	×	×
master	○	×	○
mate	○	○	○
matron	○	×	×
memsahib	○	×	×
Mephistopheles	○	×	—
messmate	○	—	—

milady	○	—	—
milord	○	—	—
minister	○	×	×
minx	○	×	—
miscreant	○	×	—
miser	○	×	×
misery	○	×	×
miss	○	○	○
Miss	×	○	×
missus	×	×	○
missy	○	×	×
mister	○	×	○
mollycoddle	○	×	×
mom	○	○	○
momma	○	×	○
mommy	○	×	○
moneybags	○	×	—
monkey	×	×	○
monsignor	○	×	×
monster	○	×	○
moocow	○	—	—
moron	○	×	○
mother	○	○	○
Mother	○	×	×
mother superior	○	×	×
Mr	×	○	×
Mrs	×	○	×
Ms	×	○	×
muddler	○	×	×
mug	○	×	×
muggins	○	×	×
mum	○	○	○
mummy	○	○	○
murderer	○	×	×
mush	○	×	×
mutt	○	×	×

nigger	○	×	×
ninny	○	×	×
nit	○	×	×
nitwit	○	×	×
noaccount	○	×	—
nosy parker	○	×	—
numskull, numbskull	○	×	○
nurse	○	○	×
oaf	○	×	×
officer	○	×	○
old boy	○	×	×
old man	○	×	×
old-timer	○	×	×
operator	○	×	○
pa	○	×	○
Paddy	○	×	○
padre	○	×	○
pal	○	○	○
paleface	○	×	×
pandit	○	×	×
pansy	×	×	○
pantaloon	○	×	×
papa	○	×	○
pappy	○	×	×
partner	○	×	○
pastor	○	×	×
pater	○	×	—
peasant	○	×	○
pedant	○	×	×
peg leg	○	×	×
perisher	○	×	×
pest	×	×	○
pet	○	×	○
philistine	○	×	×
phoney, phony	○	×	×

pickle	○	×	○
pig	○	×	○
piggy	○	×	×
pilot officer	○	×	—
pinhead	○	×	○
pipsqueak	○	×	○
Poll	○	—	—
Polly	○	—	—
poltroon	○	×	—
pommy	×	×	○
ponce	×	×	○
pooch	○	×	—
poof	○	×	○
poove	○	—	—
pop	○	×	○
popinjay	○	×	—
poppa	○	×	○
poppet	○	×	○
popsy	○	—	—
porter	×	○	×
poseur	×	×	○
prat	×	×	○
precious	○	×	×
President	×	○	×
pretty	○	×	×
prick	×	×	○
prig	×	×	○
Prime Minister	○	○	×
prince	○	×	×
Prince Charming	○	×	—
princess	○	×	×
prior	○	×	×
prof	○	×	○
professor	○	×	×
provost	○	×	×
pudding head	○	—	—



puff	×	×	○
punk	○	×	×
puppy	○	×	×
purser	○	×	×
puss	○	×	○
pussy	○	×	○
pussycat	○	—	○
rabbi	○	×	×
racialism	○	×	×
rapscallion	○	×	—
rascal	○	×	○
rat	○	×	○
rear admiral	○	×	—
recreant	○	×	—
rector	○	×	×
ref	○	×	×
rescue	○	×	×
Rev	○	×	×
reverence	○	×	×
Reverend	○	×	×
rifleman	○	—	×
rip	○	×	×
road hog	○	×	×
rogue	○	×	○
rotter	○	×	○
roué	○	×	×
Royal Highness	○	×	×
rumourmonger	○	×	—
runt	○	×	○
sahib	○	×	×
sap	○	×	×
sarge	○	×	—
scab	○	×	×
scalawag	○	×	—
scamp	○	×	○
scapegrace	○	—	—

scoundrel	○	×	×
scum	○	×	×
seigneur	○	×	—
senator	○	×	×
sergeant	○	×	×
sergeant major	○	×	×
sheikh, sheik	○	×	×
sheriff	○	×	×
shit	○	×	○
shorty, shortie	○	×	○
shrimp	○	×	×
Signor	○	×	—
Signora	○	×	—
Signorina	○	×	—
silly	○	×	×
sir	○	○	○
Sir	○	○	○
sire	○	×	×
sirrah	○	×	—
sis	○	×	×
sissy	○	×	○
sister	○	×	○
skipper	○	×	×
skunk	○	×	○
slacker	×	×	○
slag	×	×	○
sleepyhead	○	×	○
slob	○	×	×
slowcoach	○	×	×
so-and-so	×	×	○
sod	×	×	○
softy, softie	○	×	○
son	○	×	○
sonny	○	×	○
son of a bitch	○	×	○
son of a gun	○	×	—

sparks	○	×	×
spoilsport	○	×	×
sport	○	×	×
squad	○	×	×
squadron leader	○	×	×
squire	○	×	○
squirt	×	×	○
staff sergeant	○	×	—
stranger	○	×	×
stupid	○	×	×
subaltern	○	×	×
sucker	○	×	○
sugar	○	×	○
super	○	×	×
superintendent	○	×	×
sweet	○	×	○
sweetheart	○	○	○
sweetie	○	×	○
swine	○	×	○
Taffy	○	×	—
teacher	○	×	×
teddy	×	—	○
telltale	×	×	○
termagant	○	×	—
terror	○	×	○
thug	○	×	×
tiddler	○	×	×
tinker	○	×	○
tipstaff	○	—	—
tit	○	×	○
toady	○	×	×
traitor	○	×	×
treasure	○	×	○
trollop	○	×	○
trout	×	×	○
tsar, czar, tzar	○	×	×

tsarina, czarina, tzarina	○	×	×
turd	○	×	○
turkey	×	×	○
turncoat	○	×	×
twat	○	×	—
twerp, twirp	○	×	○
twit	○	×	○
two-timer	○	×	—
tyke, tike	○	—	○
uncle	○	○	×
varlet	○	×	—
varmint	○	×	—
vicar	○	×	○
vice-chancellor	○	×	○
villain	○	×	×
wack	○	—	—
waiter	○	○	×
wart	○	×	×
weed	×	×	○
wench	○	×	×
whippersnapper	○	×	○
windbag	○	×	×
wing commander	○	×	×
wise guy	○	×	—
woman	○	×	○
worm	×	×	○
wretch	×	×	○
zombie, zombi	○	×	×

本表は、*Longman Dictionary of Contemporary English*<sup>1,2</sup>, *Collins Cobuild English Language Dictionary*において、呼びかけ語の表示のある単語を列挙したものである。○印はその単語がそれぞれ辞書に記載されていることを示し、×印はその記載のないことを示す。—印はその単語自体がその辞書に記載されていないことを示す。

付 表 II

	LDOCE <sup>1</sup>	LDOCE <sup>2</sup>	COBUILD
dad	○	○	○
daddy	○	○	○
darling	○	○	○
dear	○	○	○
doctor	○	○	○
father	○	○	○
honey	○	○	○
lady	○	○	○
love	○	○	○
madam	○	○	○
Madam	○	○	○
mate	○	○	○
miss	○	○	○
mom	○	○	○
mother	○	○	○
mum	○	○	○
mummy	○	○	○
pal	○	○	○
sir	○	○	○
Sir	○	○	○
sweetheart	○	○	○

三つの辞典に共通である呼びかけ語を抽出したものである。

付 表 III

分 類	単 語 数 (総数 530 語)	%
S	140	26.4
A	81	15.3
D	253	47.7
V	22	4.2
K	34	6.4

この表は付表 I の呼びかけ語を内容別に分類し、その総数と百分比等を示したものである。

表に用いられている表示は次のことを表す。

S = 地位, 資格を表す語

A = 愛情表現

D = 軽べつ的表現

V = 職業名を表す語

K = 親族用語

### References

- Brown, R. and M. Ford (1964). "Address in American English", *Language in Culture and Society*, D. Hymes (ed.). New York : Harper & Row, pp. 234-244.
- Ervin - Tripp, S. M. (1972). "Sociolinguistic Rules of Address", *Sociolinguistics*, J. B. Pride and J. Holmes (eds.). Harmondsworth : Penguin Books, pp. 225-240.
- Procter, P. (1978). *Longman Dictionary of Contemporary English*. [LDOCE] London : Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1972). *A Grammar of Contemporary English*. London : Longman.
- (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Schneider, D. M. and G. C. Homans (1955). "Kinship Terminology and the American Kinship System," *American Anthropologist*, Vol. 57, pp.

1194-1208.

Sinclair, J. (1987). *Collins Cobuild English Language Dictionary*. [COBUILD] London : Collins.

Summers, D. (1987). *Longman Dictionary of Contemporary English*. [LDOCE] Second Edition London : Longman.

鈴木孝夫 (1970). 「親族名称による英語の自己表現と呼称——文学作品に表われた用例を中心とする予備調査——」, 慶応義塾大学言語文化研究所『紀要』第1号, pp.147-175.

Trudgill, P. (1974). *Sociolinguistics : An Introduction*. Harmondsworth : Penguin Books.

Whitcut, J. (1980). "The Language of Address", *The State of the Language*, L. Michaels and C. Ricks (eds.). Berkeley : University of California Press, pp. 89-97.

Zwicky, A. M. (1974). "Hey, Whatsyourname!", *Papers from the tenth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 787-801.